

仮想的有能感と自己愛

—両者を構成する要素と他の諸変数との関連—

澄川 采加 [鹿児島大学大学院教育学研究科]

稲垣 勉 [鹿児島大学教育学系 (教育心理学)]

島 義弘 [鹿児島大学教育学系 (教育心理学)]

Assumed competence and narcissism:

The relationship between the components of both and other variables

SUMIGAWA Ayaka, INAGAKI Tsutomu and SHIMA Yoshihiro

キーワード：他者軽視傾向、自尊感情、評価過敏性自己愛、誇大性自己愛

問題・目的

「自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価、軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚（速水・木野・高木，2004，p.1）」と定義される仮想的有能感という概念がある。それは根拠のない偽りの有能感であり、無意識的な感情で、他者軽視という行動として表面化し、その行動によってさらに仮想的有能感が強化されていく（速水，2006）。また、仮想的有能感の測定には他者軽視傾向の程度を測る尺度（Hayamizu, Kino, Takagi, & Tan, 2004）が用いられる。その尺度を用いて測定された他者軽視傾向の高い人は、人間関係がうまくいかなかった経験が多いこと（速水・木野・高木，2005）や、いじめの被害経験も加害経験も多いこと（松本・山本・速水，2009）などの特徴を持つことが明らかにされている。このように、他者軽視傾向の高さは、対人場面においてネガティブな影響を及ぼすことが示唆されている。

しかし、他者軽視傾向尺度で測定されるものは、定義通りの「根拠のない他者軽視」だけでなく「純粋な自信ゆえの他者軽視」が混在している可能性がある。そこで速水・小平（2006）は、この尺度と併せて自尊感情を測定し、それぞれを軸として4象限に分類する「有能感の4類型」を提唱した。有能感の4類型には、自尊型、全能型、仮想型、萎縮型からなる（速水，2006）。そのうち他者軽視傾向が高く自尊感情の低い仮想型は、速水他（2004）の定義する仮想的有能感を最も表した類型とされている。仮想型の人の特徴として、日常の対人関係において抑鬱感情や敵意感情を強く感じやすく、その変動も大きいことが明らかにされている（小平・小塩・速水，2007）。

以上のような特徴を有する仮想的有能感は、速水（2006, 2012）によって自己愛との異同が言及されている。両者の類似点として、速水（2006）は両者が「甘い自己評価」を有する点を挙げている。一方で両者の相違点として、速水（2012）は自尊感情を高めるための方略として両者の視点の方向性が自己愛は自己に、仮想的有能感は他者に向いている点を挙げている。このように仮想的有

能感と自己愛の異同は様々な観点から理論的に述べられている。

仮想的有能感と自己愛の異同を実証的に検討したものとして澄川・稲垣・島 (2019) が挙げられる。澄川他 (2019) は、有能感の4類型と同様に自己愛を評価過敏性と誇大性の2つの次元から4象限に分類したもの (中山・中谷, 2006) を用いて仮想的有能感と自己愛の異同を検討している。以下、自己愛を4象限に分類したものを便宜的に「自己愛の4類型」と呼ぶこととする。自己愛の4類型は、誇大型、混合型、過敏型、低自己愛群からなる (中山・中谷, 2006)。澄川他 (2019) は、有能感の4類型と自己愛の4類型において、自尊感情と誇大性が自己の次元として、他者軽視傾向と評価過敏性が他者の次元として一定の相関が見られ、それぞれの類型については、カイ二乗検定を行った結果、全能型は混合型と、仮想型は過敏型と、自尊型は誇大型と、萎縮型は低自己愛群と一定の対応関係があることが明らかにされた。しかし、全能型は誇大型とも、萎縮型は過敏型とも対応しており、一部異なる部分も見られた。このことから、有能感の4類型と自己愛の4類型は完全に一致するわけではないことが示唆された。よって本研究では有能感の4類型と自己愛の4類型の相違点について明らかにするために、それぞれを構成する要素が他の諸変数をどのように予測するのか検討する。

本研究では、共感性、対人恐怖心性、自己愛人格目録 ((Narcissistic Personality Inventory; 以下 NPI), 攻撃性、友人関係満足感、楽観性の計6つを変数として取り上げる。その理由は、有能感の4類型と自己愛の4類型をそれぞれ構成する4つの要素のいずれかとの関連が先行研究で示されているためである。そのうち、共感性や攻撃性は自己と他者のどちらに向けられるものかも考慮して検討する。有能感の4類型と自己愛の4類型を構成する他者軽視傾向、自尊感情、評価過敏性、誇大性の4つの要素が、各下位尺度をどのように予測するか、先行研究をもとに以下のような予想を立てた。

まず共感性について、速水他 (2004) は他者軽視傾向が共感性と負の関連を示すことを明らかにしている。その共感性にも「相手がどう感じているか」を想像する他者指向的なものと、「自分はどう感じるか」を想像する自己指向的なものがあり、速水 (2012) は仮想的有能感の高い人は他者指向的な共感性が低く、自己指向的な共感性が高いことを明らかにしている。よって他者軽視傾向は他者指向的な共感性に負の影響が、自己指向的な共感性には正の影響が予想される。有能感の4類型と自己愛の4類型を構成する4つの要素の一つである自尊感情は、鈴木・木野 (2008) と同様に他者指向的な共感性と自己指向的な共感性のどちらも影響が見られないと予想できる。また、自己愛の2側面のうち評価過敏性について、中山・岡田 (2008) が過敏な自己愛者は共感的に相手の話を聴くという受容的な対人態度を持っている可能性を指摘しており、このことから評価過敏性が高いと共感性が高いと考えられる。しかし、過敏な自己愛者のこの共感的な態度は「必ずしも純粋な親和動機に根ざしたものではなく、他者による保証を得ることにより自尊心や自己評価を維持しようとするという、過敏な自己愛者に特徴的な自己評価維持のあり方を反映したものである可能性もうかがえる (中山・岡田, 2008, p.65)」と述べられている。これらを踏まえると、評価過敏性から自己指向的な共感性への正の影響が予想できる。さらに、誇大性については、「臨床的、実証的に指摘される共感性の低さは、誇大な自己愛者に限った特徴である (中山・岡田, 2008, p.65)」とあること

から、他者指向的共感性への負の影響が予想される。

次に対人恐怖心性は、人見知りや過度の気遣い、対人緊張の強さと関係していることから、対人恐怖心性が高い人は精神的に不健康な状態にあると考えられる。鈴木・速水（2015）が精神的健康の指標として主観的幸福感を挙げ、主観的幸福感と他者軽視傾向、自尊感情との関連を検討した結果、主観的幸福感は自尊感情とのみ負の関係にあることが明らかになった。よって、他者軽視傾向と自尊感情からの対人恐怖心性への影響は、自尊感情からのみ負の影響が予想される。評価過敏性と誇大性については、清水・中山・小塩（2012）の報告では評価過敏性と対人恐怖心性が正の相関関係に、誇大性とは負の相関関係にあったことから、評価過敏性からは正の影響が、誇大性からは負の影響が予想できる。

NPIの下位尺度である注目賞賛欲求、優越感・有能感、自己主張性の3つについて述べる。速水（2006）は仮想的有能感と自己愛の相違について、NPIの下位尺度を用いて、両者は概念の範囲が異なると指摘している。具体的には仮想的有能感は「有能感」という人間の能力的側面のみにも焦点を当てているが、自己愛は能力的側面（優越感・有能感）に加え人格的側面（注目賞賛欲求と自己主張性）にも焦点を当てているという。つまり仮想的有能感と自己愛はどちらも「有能感」を有する点で類似しているものの、自己愛の方が概念の範囲が広いということを示唆している。このことから、他者軽視傾向からNPIの優越感・有能感へは正の影響があると予想できる。自尊感情からの影響について、藤井・澤海・相川（2014）が自尊感情はNPIの3つの下位尺度といずれも正の相関関係にあることを明らかにしていることから、自尊感情からNPIの3つの下位尺度すべてに正の影響があると予想できる。また、清水他（2012）は小塩（2002）のNPI-S（自己愛人格目録短縮版）を一方の軸がNPIの3つの下位尺度を総合した「自己愛総合」で、もう一方の軸がNPIの注目賞賛欲求と自己主張性が対比して存在する「注目－主張」の2成分に分けたモデルをもとに、自己愛の2側面との関連を検討している。その結果、評価過敏性が注目－主張と正の相関関係（ $r=.52$ ）にあることと、誇大性が自己愛総合と強い正の相関関係（ $r=.82$ ）にあることが明らかにされた。さらに「過敏な自己愛者は自己愛的でない人と同じくらい非主張的である（中山，2018，p.149）」とある。よって、誇大性からNPIの3つの下位尺度すべてに正の影響が、評価過敏性からは注目賞賛欲求へ正の影響、自己主張性へ負の影響が予想できる。

攻撃性について、それが他者に向くか、自己に向くか、方向によって違いがあると考えられるため、それぞれの予想を立てることとする。仮想的有能感の高い人の特徴として、攻撃性が高く協調性が低い傾向にあること（速水，2006）やいじめの加害経験が多い（松本他，2009）ことが明らかにされている。このことから仮想的有能感の高い人は他者に対する攻撃性が高いと考えられる。よって、他者軽視傾向から他者への攻撃性へ正の影響が予想できる。自己愛について、蛭田・田名場（2012）は過敏な自己愛は自責という形で自身に攻撃性を向けることを明らかにしていることから、評価過敏性から自己への攻撃性に正の影響が予想できる。また、誇大な自己愛者は自分と類似した他者に自己評価を貶められる経験をした場合に、他者に対して攻撃的な行動をとることが示唆されていることや（中山，2018）、NPIで測定される自己愛傾向の高い人は「言語的攻撃」や「身体的攻

撃」をしやすいこと(湯川, 2003)が明らかにされている。NPIは自己愛の2側面のうち主に誇大性の側面を測定していること(Wink, 1991)を踏まえると、誇大性から他者への攻撃性に正の影響が予想できる。

友人関係満足感について、速水他(2004)は、他者軽視傾向は友人関係満足感とは負の相関関係にある一方、自尊感情とは正の相関関係にあることを明らかにしており、本研究においても他者軽視傾向から友人関係満足感へ負の影響が、自尊感情からは正の影響が予想できる。また、相澤(2002)が自己愛の過敏特性に対人退却的な要素が含まれると示唆しており、対人関係において不安を感じ回避的な行動を行っているため十分な友人関係を形成できている可能性は低く、形成した友人関係に対しても維持することに気疲れしている可能性がある。このように評価過敏性の高い人は友人関係に満足しているとは考え難い。よって評価過敏性から友人関係満足感へ負の影響が予想できる。さらに、伊藤・村瀬・金井(2011)は誇大性自己愛傾向の側面がふれ合い恐怖心性の規定要因である可能性を指摘している。これは誇大性の高い人が誇大的な自己が露呈しないように防衛するために、他者からの視線や評価の圏外に撤退している可能性がある。つまり、自己評価を誇示し、自己を満たしてくれる存在である友人との関係には、自己評価が脅かされない程度の表面的な関係であっても満足していると考えられる。よって誇大性から友人関係満足感へは正の影響が予想できる。

最後に楽観性について述べる。楽観性は「物事がうまく進み、悪いことよりも良いことが生じるだろうという信念を一般的にもつ傾向(戸ヶ崎・板野, 1993, p.1)」である。「自己のポジティブな側面に過度に注目する認知によって、他人よりも自分が優位であると思ひ、他者を卑下したり軽んじる傾向が生じる可能性が考えられる(高橋・森本, 2012, p.31)」とあることから、楽観性の高い人は他者軽視傾向も高いと考えられる。よって他者軽視傾向から楽観性へ正の影響が予想できる。また、楽観性は主観的幸福感と正の関連があることや、主観的幸福感は自尊感情と正の相関関係にあることが明らかにされている(橋本・子安, 2011)。よって自尊感情から楽観性へ正の影響が予想できる。自己愛の2側面からの影響について、評価過敏性は周囲の人の反応に敏感であり、常に周囲の人に注意深く耳を傾ける特徴があることから、物事に対して楽観的であるとは考え難い。よって評価過敏性から楽観性へは負の影響が考えられる。一方で、誇大性が高い人は周囲の人からの反応に鈍感で、自己に夢中であるため、自己に対してポジティブな認知をされると考えられる。よって誇大性から楽観性へは正の影響が予想できる。以上の予想はTable1にまとめた。

Table1 有能感の4類型と自己愛の4類型の4つの要素の諸変数への影響についての予測

	共感性		対人恐怖心性		NPI			攻撃性		友人関係満足感	楽観性
	他者指向的	自己指向的	注目賞賛欲求	優越感・有能感	自己主張性	他者	自己				
他者軽視傾向	-	+			+			+		-	+
自尊感情			-	+	+	+				+	+
評価過敏性		+	+	+		-		+		-	-
誇大性	-		-	+	+	+		+		+	+

※左項目がそれぞれ上項目をどのように予測するかを表す。

方法

調査対象者

大学生 277 名（男性 132 名，女性 141 名，不明 4 名， $M_{age}=20.67$ ($SD = 1.68$)) を対象とした。

調査期間

本調査は 2020 年 1 月下旬—2 月上旬にかけて行った。

質問紙

フェイスシート 年齢，性別の記入を求めた。

他者軽視傾向尺度 速水 (2006) の尺度を用いた。「自分の周りには気のきかない人が多い」や「他の人の仕事を見ていると，手際が悪いと感じる」など，全 11 項目からなり，「全く思わない」を 1 点，「よく思う」を 5 点とする 5 件法で評定を求めた。

自尊感情尺度 Rosenberg (1965) の自尊感情尺度の日本語版 (山本・松井・山成，1982) の尺度を用いた。「少なくとも人並みには，価値のある人間である」や「自分に対して肯定的である」など，全 10 項目からなり，「当てはまらない」を 1 点，「当てはまる」を 5 点とする 5 件法で評定を求めた。

評価過敏性—誇大性自己愛尺度 中山・中谷 (2006) の尺度を用いた。「人といると，馬鹿にされたり軽く扱われはしないかと不安になる」や「人に軽く扱われて，あとですごく腹が立つことがある」など 8 項目からなる評価過敏性と，「自分にはどこか，他の人をひきつけるところがある」や「私は他に並ぶ人がいないくらい，特別な存在である」など 10 項目からなる誇大性の 2 つの下位尺度から構成される全 18 項目からなる。「全くあてはまらない」を 1 点，「とてもあてはまる」を 5 点とする 5 件法で評定を求めた。

多次元共感性尺度 鈴木・木野 (2008) の尺度のうち，「悲しんでいる人を見ると，なぐさめてあげたくなる」や「他人が失敗しても同情することはない (逆転項目)」など 5 項目からなる他者指向的反応と，「他人の成功を素直に喜べないことがある」や「他人の失敗する姿をみると，自分はそうなりたくないと思う」など 4 項目からなる自己指向的反応の 2 つの下位尺度を用いた。計 9 項目を，「全くあてはまらない」を 1 点，「とてもよくあてはまる」を 5 点とする 5 件法で評定を求めた。

対人恐怖心性—自己愛傾向 2 次元モデル尺度短縮版 清水他 (2012) の尺度のうち，対人恐怖心性領域を測定する 10 項目を用いた。「すぐに気持ちが悪くなる」や「人と目を合わせていられない」などから構成され，「全然あてはまらない」を 1 点，「非常にあてはまる」を 7 点とする 7 件法で評定を求めた。

NPI 小塩 (1998a) の尺度を用いた。注目賞賛欲求，優越感・有能感，自己主張性の 3 つの下位尺度について，小塩 (1998b) において因子負荷量の高かった項目を 4 項目ずつ抜粋し，計 12 項目を用いた。それぞれの項目例は順に「私は，みんなからほめられたいと思っている」，「私は，才能に恵まれた人間であると思う」，「私は，自分の意見をはっきり言う人間だと思う」だった。「全くあてはまらない」を 1 点，「とてもよくあてはまる」を 5 点とする 5 件法で評定を求めた。

攻撃性尺度 (AAQ) 安立 (2001) の尺度のうち，対象攻撃行動 (8 項目)，自責感 (7 項目)，自己破壊行動 (5 項目) の 3 つの下位尺度を用いた。それぞれの項目例は順に「腹の立つことをされると，にらみつけてやりたくなる」，「不愉快なことでも無理に我慢してしまう」，「自分を傷つけたくなる時がある」だった。全 20 項目からなり，「全くあてはまらない」を 1 点，「とてもよくあて

はまる」を6点とする6件法で評定を求めた。

生活満足感尺度 鈴木(2002)の尺度のうち、「今の友人関係に満足している」や「友達といると楽しい」などからなる友人関係満足感の下位尺度を用いた。全6項目を、「全く当てはまらない」を1点、「とてもよく当てはまる」を5点とする5件法で評定を求めた。

改訂版楽観性尺度 橋本・子安(2011)の尺度を用いた。「私は自分の将来についていつも楽観的である」や「良いことが私に起こるなんてほとんどあてにしていない(逆転項目)」などの全6項目を、「全然あてはまらない」を1点、「非常にあてはまる」を5点とする5件法で評定を求めた。

手続き

講義終了後の時間などを用いて質問紙調査を行った。質問紙の尺度の提示の順番を変えたものを3種類用意し、ランダムに配布した。参加者に対し、調査への参加は任意であり、参加の有無により不利益を被ることはない旨を伝え、同意した者のみ回答するよう求めた。

結果

全項目のうち8割以上回答している273名のデータを有効回答とみなし、以下の分析に使用した。また、本研究における分析はHAD(清水, 2016)のVersion17.002を用いて行った。

尺度項目の検討と得点化 本研究で使用した尺度のうち、自己への攻撃性を測定するために安立(2001)の尺度のうち自責感と自己破壊行動の2つの下位尺度を用いた。そのうち自己破壊行動は床効果が見られる項目が多いため分析から除き、自責感のみ扱った。また、各尺度について、逆転項目を含むものはそれを処理した上で合算平均得点を求めた。得点が高いほど当該尺度名の傾向が強いことを示す。

各尺度間の相関関係と記述統計量 各尺度間の相関係数を算出し、各尺度の記述統計量と信頼性係数とあわせてTable2にまとめた。その結果、自尊感情と他者軽視傾向間には他の先行研究(e.g., 速水他, 2005)と同様に有意な相関は見られなかった。また、評価過敏性と誇大性の間にも、有意な

Table2 各尺度の記述統計量および信頼性係数, 各尺度間の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
1 他者軽視傾向	—	.01	.26***	.40***	-.18**	.29***	.10	.27***	.24***	.30***	.27***	.06	-.17**	.00
2 自尊感情		—	-.43***	.51***	.09	-.19**	-.64***	.15*	.59***	.30***	-.29***	-.58***	.32***	.44***
3 評価過敏性			—	.04	-.09	.42***	.56***	.18**	-.08	-.08	.56***	.55***	-.21***	-.29***
4 誇大性				—	-.05	.04	-.26***	.36***	.75***	.39***	-.06	-.22***	.09	.31***
5 他者指向的共感性					—	-.10	-.23***	.01	-.04	-.04	-.23***	.08	.23***	.00
6 自己指向的共感性						—	.31***	.20**	.00	-.08	.43***	.28***	-.03	.01
7 対人恐怖心性							—	-.09	-.37***	-.35***	.49***	.66***	-.34***	-.32***
8 注目賞賛欲求								—	.30***	.36***	.15*	.00	.11	.19**
9 優越感・有能感									—	.39***	-.12*	-.34***	.12*	.36***
10 自己主張性										—	.07	-.27***	.15*	.21***
11 対象攻撃行動											—	.37***	-.12*	-.07
12 自責感												—	-.20**	-.41***
13 友人関係満足感													—	.22***
14 楽観性														—
<i>M</i>	2.47	3.14	2.79	2.57	3.85	3.47	3.59	3.15	2.73	2.98	3.03	3.75	4.01	3.02
<i>SD</i>	0.65	0.67	0.79	0.63	0.55	0.66	1.18	0.84	0.71	0.85	0.90	0.93	0.58	0.56
α	.85	.85	.85	.83	.68	.58	.88	.77	.77	.76	.82	.82	.80	.55

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

Table3 重回帰分析の結果

	β				
	他者指向的共感性	自己指向的共感性	対人恐怖心性	注目賞賛欲求	優越感・有能感
他者軽視傾向	-.16 *	.22 ***	.03	.12	-.01
自尊感情	.12	.00	-.46 ***	.09	.28 ***
評価過敏性	.01	.36 ***	.36 ***	.17 **	.02
誇大性	-.05	-.06	-.05	.26 **	.61 ***
R ²	.04 *	.21 ***	.51 ***	.17 ***	.62 ***
	自己主張性	対象攻撃行動	自責感	友人関係満足感	楽観性
他者軽視傾向	.23 ***	.20 ***	-.02	-.16 *	-.04
自尊感情	.14	.00	-.40 ***	.30 ***	.26 **
評価過敏性	-.09	.51 ***	.39 ***	-.04	-.18 **
誇大性	.23 **	-.16 *	-.03	.01	.20 **
R ²	.21 ***	.35 ***	.44 ***	.13 ***	.23 ***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

相関は見られなかった。中山・中谷（2006）では有意な弱い正の相関（ $r=.14$ ）だったものの、本研究の相関係数とほぼ同程度であることや先行研究の調査時の調査対象者が 1000 名を超えていたことを考慮すると、先行研究と同様の結果が得られたと解釈できる。

諸変数への影響の検討 有能感の 4 類型と自己愛の 4 類型を構成する要素である他者軽視傾向、自尊感情、評価過敏性、誇大性の 4 つを独立変数、その他の 10 個の下位尺度（他者指向的共感性、自己指向的共感性、対人恐怖心性、注目賞賛欲求、優越感・有能感、自己主張性、対象攻撃行動、自責感、友人関係満足感、楽観性）をそれぞれ従属変数として重回帰分析（強制投入法）を行った（Table3）。その結果、有能感の 4 類型と自己愛の 4 類型の異同を示唆する有意な影響の見られたもののうち、有能感の 4 類型と自己愛の 4 類型に一定の対応関係があることを支持する変数として自己指向的共感性と NPI の優越感・有能感が、相違点を示す変数として NPI の注目賞賛欲求と友人関係満足感が示された。また、この分析において多重共線性は認められなかった（VIF<1.90）。

有能感の 4 類型と自己愛の 4 類型の対応関係を支持する結果の得られた 2 つの変数について、自己指向的共感性は、他者軽視傾向と評価過敏性から正の影響が、優越感・有能感へは自尊感情と誇大性から正の影響が見られた。

また、両者の相違点を示す結果として得られた 2 つの変数について、注目賞賛欲求へは自己愛の 4 類型の要素である評価過敏性と誇大性から正の影響が、友人関係満足感へは有能感の 4 類型の要素である他者軽視傾向と自尊感情から正負の影響が見られた。このように注目賞賛欲求と友人関係満足感、有能感の 4 類型と自己愛の 4 類型のどちらかみの要素から予測されていた。

考察

本研究は、有能感の 4 類型と自己愛の 4 類型の異同を明らかにするために、両者を構成する 4 つの要素が、いずれかと関係のある様々な下位尺度をどのように予測するか検討した。重回帰分析の結果、両者の対応関係を支持する変数として、自己指向的共感性と NPI の優越感・有能感の 2 つがあることが明らかになった。一方、相違点を示す変数として、NPI の注目賞賛欲求と友人関係満足

感の2つがあることが明らかになった。

自己指向的共感性へは他者軽視傾向と評価過敏性という他者の次元が、優越感・有能感へは自尊感情と誇大性という自己の次元が影響していた。有能感の4類型と自己愛の4類型の他者の次元が高い類型（有能感の4類型：全能型，仮想型；自己愛の4類型：混合型，過敏型）は自己指向的な共感を行いやすく，両者の自己の次元が高い類型（有能感の4類型：自尊型，全能型；自己愛の4類型：誇大型，混合型）は優越感・有能感を感じやすいことが示唆された。

自己指向的共感性へ他者の次元の要素からのみ影響が見られたことについて，自己指向的共感性を測定する尺度は，他者の状況に対して相手の立場に立って同情したり，気持ちに寄り添ったりするのではなく，自分に状況を投影して自分がそうならなくてよかったと思ったり，他人の成功に焦りを感じたりするもので構成されている。それらは一見，自己に対して注目しているかのようだが，それも他者の存在があってこそだと考えられる。よって，速水（2012）が他者の次元の要素である他者軽視傾向と評価過敏性は他者に注意が向いている点で類似していると述べていることから，本研究の結果は支持できる。また，自己の次元の要素のみから影響が見られたNPIの優越感・有能感については，NPIで測定される自己愛は誇大性の側面を予測しており（Wink, 1991），誇大性は他者に対して無関心で自己中心的な特徴を有していることから，本研究の結果は妥当であると考えられる。

両者の相違点を示す結果として得られた2つの変数について，注目賞賛欲求へは自己愛の4類型の要素である評価過敏性と誇大性のみが，友人関係満足感へは有能感の4類型の要素である他者軽視傾向と自尊感情のみが影響していた。このことから，この2つの変数は有能感の4類型と自己愛の4類型の異なる部分を示す変数であることが示唆された。

自己愛の4類型の要素からのみ影響の見られた注目賞賛欲求は，速水（2012）は仮想的有能感と自己愛の違いについて，自己愛の高さは自己の重要性を認知しているために起こるが，仮想的有能感の高さにはそれは関係ないことを指摘している。NPIは主に自己愛の誇大性を測定している（Wink, 1991）ため，誇大性からの影響は妥当であると考えられる。一方で，誇大性とは対照的に評価過敏性が他者の反応に敏感な特徴を持つのは，自己の重要性を認知しているため，自分が傷つかないような防衛行動をするために敏感であると考えられる。以上のことから，速水（2012）の述べているように自己の重要性を認知しているかどうかという点が有能感の4類型と自己愛の4類型の相違点の1つである可能性が考えられる。しかし，自尊感情も自己の重要性について認知しているかを捉えるものであることや，藤井他（2014）では，自尊感情と注目賞賛欲求との間に正の相関関係が見られたことから，本研究で自尊感情から注目賞賛欲求に影響が見られなかった点については「自己の重要性」がどのようなものかを詳しく検討する必要があるだろう。また，有能感の4類型の要素からのみ影響の見られた友人関係満足感について，本研究においては自己愛からの影響が見られなかったものの，自己愛と友人関係の関連は様々な先行研究で考察されている（e.g., 岡田, 2007）。しかし，友人関係においてその関係性ではなく満足感については影響が見られないという本研究の結果は，より検討を進めていく必要があるだろう。

本研究では有能感の4類型と自己愛の4類型の異同を示唆する変数を明らかにしたが、それらの共通した特徴を見出すことで両者の相違点をより明確にすることが可能になるだろう。また、有能感の4類型と自己愛の4類型から特徴的な予測が見られなかった変数に関する考察を進めることも、両者の異同を捉える上で重要だと考えられる。

引用文献

- 安立 奈歩 (2001). 攻撃性の諸相に関する研究 京都大学大学院教育学研究科紀要, 47, 475-487.
- 相澤 直樹 (2002). 自己愛的人格における誇大特性と過敏特性 教育心理学研究, 50, 215-224.
- 速水 敏彦 (2006). 他人を見下す若者たち 講談社
- 速水 敏彦 (2012). 仮想的有能感の心理学 他人を見下す若者を検証する 北大路書房
- 速水 敏彦・木野 和代・高木 邦子 (2004). 仮想的有能感の構成概念妥当性の検討 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, 51, 1-8.
- 速水 敏彦・木野 和代・高木 邦子 (2005). 他者軽視に基づく仮想的有能感——自尊感情との比較から—— 感情心理学研究, 12, 43-55.
- Hayamizu, T., Kino, K., Takagi, K., & Tan, E. H. (2004). Assumed-competence based on undervaluing others as determinant of emotions : Focusing on anger and sadness. *Asia Pacific Education Review*, 5, 127-135.
- 速水 敏彦・小平 英志 (2006). 仮想的有能感と学習観および動機づけとの関連 パーソナリティ研究, 14, 171-180.
- 橋本 京子・子安 増生 (2011). 楽観性とポジティブ志向および主観的幸福感の関連について パーソナリティ研究, 19, 233-244.
- 蛭田 陽子・田名場 忍 (2012). 自己愛傾向と外向・内向攻撃性との関連 : 無関心型および過敏型自己愛傾向に着目して 弘前大学大学院教育学研究科心理臨床相談室紀要, 9, 18-30.
- 藤井 勉・澤海 崇文・相川 充 (2014). 顕在的・潜在的自尊心の不一致と自己愛——自己愛の3下位尺度との関連から—— 感情心理学研究, 21, 162-168.
- 伊藤 亮・村瀬 聡美・金井 篤子 (2011). 過敏性自己愛傾向が現代青年のふれ合い恐怖心性に及ぼす影響について——自己愛脆弱性尺度を用いた検討—— パーソナリティ研究, 19, 181-190.
- 小平 英志・小塩 真司・速水 敏彦 (2007). 仮想的有能感と日常の対人関係によって生起する感情経験——抑鬱感情と敵意感情のレベルと変動性に注目して—— パーソナリティ研究, 15, 217-227.
- 松本 麻友子・山本 将士・速水 敏彦 (2009). 高校生における仮想的有能感といじめの関連 教育心理学研究, 57, 432-441.
- 中山 留美子 (2018). 第7章 青年期の自己愛の発達 島 義弘・西野 泰代 (編) 個と関係性の発達心理学——社会的存在としての人間の発達—— 北大路書房, 143-160.
- 中山 留美子・中谷 素之 (2006). 青年期における自己愛の構造と発達の变化の検討 教育心理学研

究, 54, 188-198.

- 中山 留美子・岡田 涼 (2008). 対人相互作用場面における認知・行動は自己愛をどう反映するか 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集, 64-65.
- 小塩 真司 (1998a). 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, 46, 280-290.
- 小塩 真司 (1998b). 自己愛傾向に関する一研究——性役割観との関連—— 名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科, 45, 45-53.
- 小塩 真司 (2002). 自己愛傾向によって青年を分類する試み——対人関係と適応, 友人によるイメージ評定からみた特徴—— 教育心理学研究, 50, 261-270.
- 岡田 努 (2007). 大学生における友人関係の類型と, 適応及び自己の諸側面の発達の関連について パーソナリティ研究, 15, 135-148.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- 清水 健司・中山 留美子・小塩 真司 (2012). “2種類の自己愛”モデルにおける相互関係の検討 信州大学人文科学論集人間情報学科編, 47, 53-67.
- 清水 裕士 (2016). フリーの統計ソフトHAD——機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案—— メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- 澄川 采加・稲垣 勉・島 義弘 (2019). 有能感の4類型と自己愛の4類型の対応関係の検討 九州心理学会第80回大会発表論文集, 56.
- 鈴木 有美 (2002). 自尊感情と主観的ウェルビーイングからみた大学生の精神的健康——共感性およびストレス対処との関連—— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科 心理発達科学, 49, 145-155.
- 鈴木 有美・速水 敏彦 (2015). 精神的健康との関連からみた防衛機制としての仮想的有能感 感情心理学研究, 23, 23-31.
- 鈴木 有美・木野 和代 (2008). 多次元共感性尺度 (MES) の作成——自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて—— 教育心理学研究, 56, 487-497.
- 高橋 誠・森本 哲介 (2012). ポジティブ側面への積極的注目に関する研究——ポジティブ志向, 主観的幸福感, ネガティブ認知, 他者軽視との関連—— 学校教育学研究論集, 26, 29-39.
- 戸ヶ崎 泰子・坂野 雄二 (1993). オプティミストは健康か? 健康心理学研究, 6, 1-11.
- Wink, P. (1991). Two faces of narcissism. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 590-597.
- 山本 真理子・松井 豊・山成 由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.
- 湯川 進太郎 (2003). 青年期における自己愛と攻撃性——現実への不適応と虚構への没入をふまえて—— 犯罪心理学研究, 41, 27-36.